

修士論文 (要旨)

2014年7月

大腿骨頸部骨折による入院高齢者の回復意欲の変化と関連要因

指導 長田 久雄 教授

老年学研究科

老年学専攻

212J6904

竹中 恵子

第 1 章 先行研究、研究背景および研究目的	1
1)入院が及ぼす高齢患者への影響	1
2) 臨床現場における高齢者の意欲と看護の役割	1
3) 意欲を構成するもの	2
4) 高齢者に多い疾患としての大腿骨頸部骨折	3
5) 研究目的	4
第 2 章 研究方法	5
1. 研究デザイン	5
2. 調査対象	5
3. 調査方法	5
1) 観察法および日々のインタビュー：	6
2) 半構造化インタビュー：	6
4. 分析方法	6
5. 調査期間	7
6. 倫理的配慮	7
第 3 章 結果	8
I カテゴリー化の定義	8
II. 大腿骨頸部骨折による入院高齢者の回復意欲の変化	9
A) 事例 1	11
B) 事例 2	15
C) 事例 3	18
D) 事例 4	21
E) 事例 5	24
F) 事例 6	26
G) 事例 7	29
第 4 章 考察	32
第 5 章 結論	36
引用文献	i
参考文献	ii
補遺	I
1. 大腿骨頸部骨折による入院高齢者の回復意欲にかかわる関連要因	I
2. 大腿骨頸部骨折による高齢患者の回復過程に沿った心理的特徴と関連要因	V
参考資料：術後活性度と安定度の経日的変化	

要旨

序章

本研究は、高齢者が大腿骨頸部骨折によって入院を余儀なくされた時、寝たきりや閉じこもりが誘発すると言われている。本研究は、そのような入院生活を送る高齢者の回復意欲の変化と関連要因について明らかにすることにより、高齢の患者自身が回復意欲を維持、向上しながら入院生活を送ることができるような看護援助の方法を探ることを目的とした

第1章 研究目的

本研究の目的は、大腿骨頸部骨折により観血的な治療を受けた入院高齢者の回復意欲の変化と関連要因を明らかにすることにより、高齢患者の回復意欲の低下を防ぎ、意欲を維持向上できる看護援助について検討することである

第2章 研究方法

1. 研究デザイン

本研究では、大腿骨頸部骨折による高齢患者の入院体験に焦点をあて、入院期間中における回復意欲の変化と関連要因を明らかにするために、データを定性的にコーディングし記述する、質的記述的研究方法を選択した

2. 調査対象

大腿骨頸部骨折の観血的な治療のために、急性期病棟に入院してきた65歳以上の高齢者で面接可能と判断される患者を対象とする

3 調査方法

今回、大腿骨頸部骨折にて入院し、観血的治療を受けた入院高齢患者7名を対象に回復意欲に関する質問を行い、回復意欲の関連要因を明らかにするとともに、これらの関連要因が、身体的治療過程に沿って、どのように影響しているのかを、事例ごとに分析した。また、回復意欲の変化については、二次元気分尺度を用いた解析を試みた。

第3章 結果

I. カテゴリー化の定義

大腿骨頸部骨折による入院高齢者の回復意欲の変化に対し、どのような要因が関連しているのかを明らかにするためにデータ分析を行った。回復意欲にかかわる関連要因として【身体的な症状】、【ADLについて】、【回復の見込み】、【他者との相互作用】、【家族との関係】、および【自己の信念】の6つのカテゴリーが抽出された。また、関連因子の特徴から、関連要因は内的要因と外的要因に大きく2つに分類できることが分かった。

II. 大腿骨頸部骨折による入院高齢者の回復意欲の変化

入院から退院までの入院期間中における回復過程における心理的特徴を明らかにするために、回復過程をⅠ期からⅤ期に分類し、各期の心理的特徴に対して、カテゴリー化した。入院時から退院までの心理的特徴は、【受傷の衝撃と混乱】、【治療に対する心理的動揺】、【術後の安心感と回復への努力】、【回復への期待と不安】、そして【回復の知覚と希望】の経過をたどることが明らかとなった。

これら 2 つの分析をもとに各事例による分析を重ねた結果、回復意欲は個別的でさまざまなパターンが存在することが明らかになった。共通性が見られる項目は、受傷時や手術の前、インフォームドコンセント後、に意欲が低下しやすい傾向があることが分かった。また、リハビリテーションにおいて、その経過に意欲が左右されやすいことも明らかとなった。

第4章 考察

以上 7 事例の考察を行った結果、回復意欲の変化と関連要因として、次の 3 点が導き出された。

- 1) 回復意欲にかかわる関連要因は、身体的治療過程に応じて変化する
- 2) 回復意欲は主観的なものであり、患者の持つ内的要因、外的要因が相互に影響する
- 3) 他者との相互作用は、患者の回復意欲を支えるうえで、重要な働きをしている。

患者の回復意欲は、治療過程に応じて、様々な変数の影響を受けると言える。そのため、看護するうえでは、治療過程によって生じる患者の変化に目を向け、特に受傷時や手術の前、インフォームドコンセントの後など、患者の意欲が低下しやすいと思われる時ほど、患者の状態に十分に目を向けコミュニケーションを密にとるなど、患者の問題把握に努める必要が出てくる。

回復意欲は主観的なものであるため、個々の患者の持つパーソナリティ、家族背景、環境などの把握は必要である。何が重要かは、個々によって違うため、総合的なアセスメントの中から、本人の強みを導き出すことが意欲向上の鍵につながる。

患者は外的要因としてかかわる他者の存在から自己を評価する。今回のように、手術により一時的に ADL の低下を余儀なくされる疾患においては、リハビリテーションの経過に意欲が左右されやすい傾向にある。すなわち、それにかかわる医療従事者はもちろんのこと、家族を含めた他者との信頼関係は、患者の回復意欲を支えるうえで重要な働きをしている。そこを十分認識したうえで、患者に対する気遣いとコミュニケーションのあり方に十分な注意を払いべきである。看護者は、常に患者のもっとも近くにいる存在として、身体的な状況観察はもちろんのこと、本人の持つ内的要因を把握しながら、他職種に情報を提供するほか、経過に沿った適切な評価を適宜行いながら、介入の方法を変化させていくことが必要である。患者の意欲を低下させないためには、“動機付け”が必要であると言われている¹⁶⁾。患者は常に、自分の回復の見込みについて関心を持っていることから、本人やその

家族を含めた目標設定が必要である。高齢者の場合は、家族の持つ介護力によって、退院後の行先が決まる傾向にある。そのためには、退院後の自立支援を視野に入れた、退院調整への取り組みが必要になる。

第5章 結論

今回は、大腿骨頸部骨折による入院高齢者の回復意欲の変化と関連要因を明らかにすることにより、回復意欲の低下を防ぎ、意欲を維持、向上できる看護援助について検討をするため、観血的な治療を受ける入院高齢者7名について事例ごとに検討を行い、回復意欲の変化と関連要因を明らかにすることができた。長戸¹⁶⁾も述べているように、もともと意欲とは主観的なものであり特定の行動パターンをしめすものでないため、どの要因がどう関連し、患者の回復意欲に影響を与えているかは、個々の事例においてでしか解明しきれないものである。人の回復意欲には、ある一定のパターンは存在せず、個人の持つパーソナリティや家族背景または環境、そして一番重要なのは、身体的な治療経過とその時にかかわる重要な他者との相互作用である。

インタビューのみでの分析のみでは回復意欲の変化の把握が抽象的になることが避けられないため、坂入が考案した二次元区分尺度を用いた解析を試みた。その結果、研究対象者の語りから抽出した関連要因が気分の変化を反映していた。

個々のケースを見てもわかるように、気分の高まりや低下の原因は、患者がおかれている状況を、どう認識するかという内的要因に左右されることも大きい。インフォームドコンセントに代表されるように、外的要因としての医師・看護師の存在は、患者の心理に大きな影響を与えることは明確となった。そのためには、治療経過を経時的にアセスメントすることはもちろんのこと、個々の患者について、その傾向を分析し、成り行きを予測することも不可欠である。

今回の研究で明らかになったことは、回復意欲は、患者の身体的な治療過程に応じて、影響を受け、個人の資質やそこに関わる他者との相互作用によって変化することが明らかとなった。またそのパターンは常に一定でなく、治療経過によっては、回復意欲の関連要因にも影響を与え、多様に変化する。どの要因が一番重要かは、個々によって違うため、看護としては、患者の個別性を見定め、その時期にあった看護援助が提供できるように日々の観察を怠らないことが重要であるとともに、患者の近くに常に寄り添う存在として、できるだけベッドサイドに出向き、患者とのコミュニケーションを図ることが必要であることが示唆された。

引用文献

- 1) 飛田 操、高良美樹「入院患者のストレスと支援」岡堂哲夫編集『患者の心理、現代のエスプリ別冊』至文堂、2000年.
- 2) 鎌田ケイ子「第1章、疾病をもつ高齢者の理解と基本対応」鎌田ケイ子・河原礼子編集『老年看護学② 健康障害をもつ高齢者の看護』メヂカルフレンド社、平成19年.
- 3) 任 和子、他「入院患者のストレスとストレス反応に影響を及ぼす要因について」日本保健医療行動科学会編『日本保健医療行動科学会年報』第14巻、1999年.
- 4) 林 陽子、他「入院患者における自覚症状ならびにストレス認知と心理的状态の関係」日本看護研究学会編『日本看護研究学会誌』第34巻、第2号、2011年.
- 5) 森本美智子、他「病気や生活に関する不安認知が入院患者の精神的健康に及ぼす影響」『日本看護研究学会雑誌』第28巻、第2号、2005.
- 6) 半田あや、他「高齢者のADL拡大へ意欲を支える看護—躁うつ病を有する高齢者への関わりを通して—」日本看護協会編『第38回日本看護学会論文集（老年看護）』2007.
- 7) 森一恵「高齢者の行動意欲向上への看護—「寝たきりの諸要因」より—」『第33回日本看護学会論文集（老年看護）』2003.
- 8) 市川裕子、他「意欲をなくした高齢者が回復するまでの看護」日本農村医学会編『日本農村医学会雑誌』第42巻、第3号、1993.
- 9) 鎌田ケイ子「自立を目指した看護の役割」『看護実践の科学』第35巻、第5号、看護の科学社、2010年.
- 10) 寺岡加代、森野智子「施設在住要介護高齢者の意欲（Vitality Index）に関する縦断研究」『老年歯学』第25巻、第2号、2010年.
- 11) Toba, Kennji. And Nakano, Ryuhei. “Vitarity Index as a useful tool to assess elderly with dementia,” Geriatrics and Gerontology International 第2巻、2002.
- 12) 齊藤博樹、他「回復期リハビリテーション病棟入院患者における Vitality Index の刑事的変化」『理学療法科学』第24巻、サプルメント4、2011年.
- 13) 小河徳恵、他「術後患者の回復意欲となる要因」『Yamanashi Nursing Journal』第1巻、2003.
- 14) 千田みゆき、飯田澄美子「脳卒中後遺症を持つ在宅患者の機能回復意欲に関する要因」『日本看護科学会誌』第17巻、第2号、1997. .
- 15) 岩田直也 他「高齢者が骨折から再適応に至るまでの心理過程モデル」『川崎医療福祉学会誌』第19巻、第1号、2009.
- 16) 長戸和子「現代看護 ことば孝 意欲」『臨床看護』第24巻 第11号、1998.
- 17) 堤晶子「患者の闘病意欲を促進させる要因について 実習で受け持った2人の患者とのかかわりを通して考えたこと」『看護教育』第44巻、第8号、2003.
- 18) 小泉美佐子、他「手術を受けた高齢者の回復過程の知覚と回復意欲をはぐくむ看護支援について」『Kitakanto. Med. J.』 第50巻、第3号、2000.
- 19) 厚生労働省編『平成22年度我が国の保健統計』
- 20) 「わが国における発生数・発生率」日本整形外科学会・日本骨折治療学会監修、日本整形外科学会診療ガイドライン委員会・大腿骨頸部／転子部骨折診療ガイドライン策定委員会編『大腿骨頸部／転子部骨折 診療ガイドライン、改定第2版』南江堂、2011年.
- 21) 原 亜由美、他「大腿骨頸部骨折患者のリハビリテーションに対する意欲の促進要因と阻害要因」日本看護協会編『第42回日本看護学会論文集、成人看護I』、2012.
- 22) 太田節子、佐藤豊子「観血的治療を受ける高齢大腿骨頸部骨折患者の回復過程と看護援助に関する研究」『千葉看会誌』第8巻、第1号、2002.
- 23) 秋山麻美、他「整形外科患者のリハビリテーションの意欲に影響する要因の検討」『Yamanashi Nursing Journal』第1巻、第2号、2003年.
- 24) 荻野 浩「大腿骨頸部骨折の発生頻度および受傷状況に関する全国調査」厚生労働省編『厚生労働科学研究費補助金（長寿科学総合研究事業）研究報告書』平成15年.
- 25) 野村一俊「大腿骨近位部骨折の地域連携クリティカルパス」『整形外科』第64巻、第12号、2013.

参考文献

- 1) Nightingale, Florence. “Notes On Nursing,” 看護覚え書、第2版、現代社、2001.
- 2) 相川みづ江、他「一般病院に入院中の高齢患者における生活機能の変化に影響する要因」『老年看護学』第16巻、第2号、2012.
- 3) 魚尾淳子「脳血管障害患者の日常生活拡大に関する研究—意欲、自己効力感、自己効力感形成の情報源との関係に焦点をあてて—」『日本看護研究学会雑誌』第34巻、第1号、2011.
- 4) 薄井担子『改訂版 看護学原論 講義』第7版、現代社、2003.
- 5) 坂入洋右、他「心理的覚醒度・快適度を測定する二次元気分尺度の開発」『筑波大学体育科学系紀要 (Bull. Inst. Health & Sport Sci., Univ. of Tukuba)』第26巻、2003.
- 6) 桜井茂雄「ローゼンバーグ自尊感情尺度日本語版の検討」Bulletin of Tukuba Developmental and Clinical Psychology、第12巻、2000.
- 7) 佐藤栄子『事例をとおしてやさしく学ぶ中範囲理論入門』第3版、2011.
- 8) 竹中星郎「高齢者の“意欲”とは何か」『ケアマネージャー』2005年11月号.
- 9) 武分祥子「「看護の社会的役割」に関する一考察—ナイチンゲール及び『季刊総合看護』の看護分析を通じて—」立命館産業社会論集、2004.
- 10) 千葉京子、他「大腿骨頸部骨折後高齢者が「生活の折り合い」に向う心理的過程—退院1週間から退院1ヶ月後までの経過」日本看護研究学会編『日本看護研究学会雑誌』第26巻、第5号、2003.
- 11) 鳥羽研二「高齢者総合的機能評価ガイドライン、健康促進と介護予防」『日本老年医学会雑誌』第42巻、第2号、2005.
- 12) 鳥羽研二「内科年症候群と総合的機能評価」『日本内科学会雑誌 (日本内科学生涯教育講演会)』、第98巻、第3号、2009年.
- 13) 村上雅也、他「高齢者の意欲と生活動作能力の関連」『理学療法—臨床・研究・教育』第14巻、2007.
- 14) 百田武司、西亀正之「脳卒中患者の回復過程における主観的体験—急性期から回復期にかけて—」『広島大学保健学ジャーナル』第2巻、第1号、2002.
- 15) 安川揚子、他「大腿骨頸部骨折後の日常生活の自立度の変化とその関連要因についての一考察」『茨城県立医療大学紀要』第5巻、ASVPI Vol 5、1999.
- 16) 山浦晴男『質的統合法入門 考え方と手順』医学書院、2012.
- 17) 山口真由美、他「大腿骨頸部骨折手術を受けた高齢者の退院へ向けた自己効力感を高める看護」第37回老年看護、2006.
- 18) 岡堂哲雄「患者の心理—ヒューマン・ケア心理学の視点」『現代のエスプリ別冊』至文堂、2000.
- 19) 佐藤郁哉『質的データ分析法』新曜社、2013.
- 20) オリバー・サックス著、金沢泰子訳『左足をもどすまで』晶文社、1994.
- 21) Glaser BG and Strauss AL『死のアウェアネス理論と看護—死の認識と終末期ケア』木下康二訳、医学書院、2011.
- 22) Benner P and Wrubel J『現象学的人間論と看護』難波卓志訳、医学書院、2006